

『人間知性論』における知性の力能について

後 藤 愛 司

On the Power of “Understanding” in John Locke’s 《An Essay concerning Human Understanding》

Aiji Goto

Summary

As the result of the study of Book I of 《An Essay concerning Human Understanding》, it was known that the foundation of knowledge was “the passive faculty receiving IDEAS from outside” in our minds. After all, in Locke’s opinion, what existed in the mind was two elements of the IDEAS and the FACULTY (power, operation) exercised about these ideas.

In this paper, I would like to examine Locke’s theory concerning “the FACULTY exercised about ideas”, namely, “the Power of Understanding”. Then, I want to analyse the following problems:

1. Simple ideas of reflexion and the Modes of thinking.
2. the Perception and the Faculties of understanding.
3. the Faculty of reason.

Received Oct. 25, 1994

Key words: J. Locke, Perception, Faculty, Modes, Reason,

1. 知性の力能にかかわる諸問題

A) 『人間知性論』第1巻の分析（「生得の原理と観念の否定について」¹⁾を参照）の結果，受動的に観念を受け取るという事実こそが，私達の真知の根底であることが明らかになった。この純粹受動性が成り立つ場，すなわち心（白紙としての心）に対して，外部から立ち現われるものとして，観念の世界は考えられる。この観念とその様々な戯れの世界の記述こそが，『人間知性論』全体の目的である。

この観念の世界は，私達後世の解釈者にとっては，次の二つの要素の混合体と考えられる。すなわち，観念とそれらに対して働く力能（機能）の二つである。この両者を区別せず，ともに心にとって外在的なものとして，一元的に記述することが，ロックの当初の意図であった。しかし，この試みは，最終的には達成されなかった。その理由は，機能の要素（知性の力能）を，観念の一部として扱うことに困難が生じたためであると思われる。そこで私は，ロックが観念と機能の両者を取り扱った方法について再検討すべきであると思う。

B) ロックは、観念を扱う時、単純観念から複雑観念への構成論的立場をとる。すなわち、複雑観念は単純観念の組成として成立するとする立場である。複雑観念は単純観念に分割解体することができるが、単純観念の方はそれ以上に分割したり区分したりすることができない。

「人間がそれらの単純観念についてもつ明晰判明な知覚ほどその人にとってわかりきったものはあるはずがない。この単純観念はそれぞれ、それ自身において合成されていず (uncompounded), そのうちにひとつの均一な現象態 (one uniform Appearance) あるいは心における概念 (Conception in the mind) だけを含み、これをさまざまな諸観念に区別することはできない。」²⁾

単純観念を原子的なものとし、複雑観念を単純観念を材料とする構成物とみなす立場は、構想としては単純で明晰である。私たちの知性の働く対象は、いかに複雑な観念の組成物であっても、結局は、単純観念の絶対確実性に根拠をもつことになるからである。

C) 一方、観念に対して働く機能については、ロックは観念に対する時とは違って、構成論的な立場を採りえなかった。ここにロックの思想の最も大きな問題が露呈する。

ひとつの問題は、ロックがこの機能を心にとって、外在的なものとみなすことを断念し、心そのもののもつ機能として、把握するようになったことである。最初、ロックは、観念に対して働く機能を、原理的に、単純観念のひとつに含める構想を持っていたようである。しかし、『人間知性論』全体ではこの観点は徹底せず、機能の側面は、心のもつ機能すなわち知性の力能として、観念に対して能動性を持つものになっている。『人間知性論』第1巻においては「白紙」の比喻で語られていた純粹受動性としての「心」は、知性の機能の分析の中では、観念に対して能動的力能を有するものに変貌してしまうのである。この原理と方法の矛盾はロックの哲学から透明性を奪うことになる。

もうひとつの問題は、上の問題と密接に関連するが、単純観念に対して働く力能、複雑観念に対して働く力能、さらには命題に対して働く力能等の知性の諸力能を、観念（特に感覚的観念）を取り扱う時におけるような単純な構成論の見地から、統一的に把握できなかったという点である。

しかしながら、ロックによるこれら心の諸力能の解明は、間違っているとかが、見当違いであるとか、原理と矛盾するから無意味であるとか簡単にいうわけにはいかない。私にはロックの苦闘のあとが最も顕かになっているのは、彼がこれらの諸問題に立ち向かったときであると思われる。そこで、私は、この論文で、『人間知性論』における知性についてのロックの諸記述を分析し、ロック哲学における「知性の諸機能の全体像」を再構成してみたいと思う。

2. 知覚と知性

A) ロックは『人間知性論』第2巻第1章において、人間の思考の対象としての観念、彼の言葉でいえば「理知的推理と知識 (Reason and Knowledge) のすべての材料」³⁾の起源を「経験 (Experience)」からのみ得ると宣言する。この経験はふたつの側面をもつ。ひとつは、「感覚 (Sensation)」, すなわち可感的対象が感官を通して知性にもたらされる場合であるが⁴⁾, 他の側面は「内省 (Reflection)」をとおしてえられる私たちの心の作用である。

「第2に、経験が知性に観念を供給する他の源泉は、知性がすでに得てある観念に関して働くとき、私たちのうちの私たち自身の心のいろいろな作用についての知覚である。この作用は、靈魂が内省し考察するようになったとき、外の事物から得ることのできなかつた他の一組みの観念を知性に供給する。それらは知覚や考えることや疑うことや信ずることや推理することや知ることや意志することおよび私たち自身の心のいっさいのさまざまな働き (Perception, Thinking, Doubting, Believing, Reasoning, Knowing, Willing, and all the different actings of our own Minds) である。」⁵⁾

内省を通して得られる心の作用は、観念がすでに心に存在していることを前提している。観念に先立って、心の作用が知覚されるわけではない。観念と心の作用はどちらが欠けても認識は成立しない。ロックの「経験」概念は、後の感覚論者の「経験」とは異なり、感覚に根拠をもつ観念とその働きを知覚する経験にのみ限定しない。また、心の作用を観念が連想によって組織化する働きとは考えない。心が観念を持つことは、彼の思索の前提である。観念の存在を根拠にして、私たちは、「感覚の対象としての外なる物質的な事物と内省の対象としての内なる私自身の心の諸作用」を経験できるのである。(この論文では物質的事物の世界と観念の関わりの問題は扱わない。ここでは心の作用にのみ限定して考察する。)

「これらふたつ、すなわち、感覚の対象としての外なる物質的な事物と、内省の対象としての内なる私たち自身の心の作用、これだけが私たちのいっさいの観念のはじまる起源のように、私には思われる。この場合、私は、作用 (Operations) という用語を広い意味に使って、観念に対する心の働きだけでなしに、何かを考えるとこころから起こる満足あるいは落ちつかなさ (satisfaction or uneasiness) のような心の働きからときおり起こるある種の情緒 (Passion) も含める。」⁶⁾

この引用文と最前の引用文のふたつに共通に見られる問題は、心的作用と呼ばれる機能の範囲があまりにも広い領域をもっているということである。知覚、思惟から意志や情緒に至るまでの心的作用の全領域を、「観念に対する事象記述の方法」によって、統一的に把握することは可能であろうか。

物質的事物の世界に対しては、一次性質、二次性質という区分を単純観念に導入することで、事物の世界と私達の認識の間の複雑な関係を、観念という記号の関係に変換して把握することができた。この一次二次の区分の当否は別にして、ロックは構成論的見地を貫徹しながら、事物の世界を観念において把握する道を見いだしたと思われる。(『ロックの蓋然性論』⁷⁾を参照)。

しかし、心の作用については、構成論的方法の貫徹は困難であろう。観念に対して働く基本的な心の作用を単純作用として確定し、諸単純作用の構成によって、すべての心的作用が明らかになるという道が現実存在するであろうか。カントならば、「先験的悟性概念の演繹」と答えるかもしれない。しかしロックはカントではない。「演繹」ではなく、あくまで内省における「経験の事象記述」を通して、心の作用を明らかにしなければならない。ロックの当初意図した方法は、ことの成否は別にして、物質的世界を可感的観念としての単純観念からなる複雑観念の構成態として認識するのと、同様の方法を心の作用にも適用してみることであったと思われる。言い換えれば、心の作用の基本的なものを、内省による単純観念として位置付け、その構成として心の働きを説き明そうとするのである。

B) 『人間知性論』第2巻第6章「内省の単純観念について」において、ロックは心が自分の持つ観念について働く時の、心の主要な活動を次のように分類している。

「最も頻繁に考察されるし、きわめて頻繁なので、だれしも好めば自分自身のうちに覚知できる、心のふたつの大きな主要活動は次のふたつである。

知覚あるいは思考すること (Perception, or Thinking)

有意あるいは意志すること (Volition, or Willing)

思考する力能は知性と呼ばれ有意の力能は意志と呼ばれる。そして、これら心のふたつの力能ないし性能 (Powers or Abilities) は機能と呼称される。これら内省の単純観念の様相のあるもの、たとえば憶起、識別、推理、判断、真知、所信などについてはのちに語る機会があるだろう。」⁸⁾

………A (この引用文を「記述A」とする。以下同じ)

この記述に関して、ふたつの問題が存在すると思われる。ひとつは、知覚と思考を同一の機能として扱っていること。もうひとつは、内省の単純観念が知覚と有意のふたつしか挙げられてないという点である。知覚の問題はあとで説明することにして、はじめに内省の単純観念の問題を取り上げたい。

C) 単純観念は本来「いろいろ違った諸観念にそれ以上区別することができない」観念であるから、「知覚」と「有意」という内省のふたつの単純観念もそれ以上区別できないことになる。それ以上区別できない単純観念がふたつしかないとき、構成論の見地にたてば、単純観念の様相は恐ろしく貧弱なものになってしまう。また、同時に、内省の単純観念を実体化し、実体の属性や様相を導入することは、ロックの立場、知性の働きを機能として（あるいは力能、作用として）考察する立場と矛盾することになる。

この問題を具体的に検討するため、第2巻19章「思考の様相について」の記述を検討したい。この章の冒頭で彼は次のようにいう。

「心がその視線を内部へ、自分自身に向けて、自分自身の活動を観想する (contemplate) するとき、まず起こるのは思考である。そこにおいて心は非常に多様な変容 (a great variety of Modifications) を観察し、そこから、判明な(別個な) (distinct) 諸観念を受け取る。」⁹⁾………B

この引用における「思考」は先の引用(記述A)における「知覚」とおなじく、単純観念であろうか。思考の変容が、様相としての多様な諸観念を生み出すという論理は正しいであろうか。この引用に続いて、ロックは次のような諸観念を思考の様相としてあげる。

「1 感覚 Sensation 2 憶起 Remembrance 3 想起 Recollection 4 観想 Contemplation
5 注意 Attention 6 専心ないし考究 Intention, or Study 7 夢想 Dreaming 8 忘我 Extasy
9 推理 Reasoning 10 判断 Judging 11 有意 Volition 12 真知 Knowledge etc.」¹⁰⁾………C

ロックは様相という概念を常に、次のふたつの観点から考察している。第2巻12章における記述によれば次のふたつである。

① 実体の性状 [作用・性質] (Affections) と考えられる複雑観念¹¹⁾

② 単純観念の集成 (同じ単純観念の集成である単純様相と、いくつかの種類観念の集成として

の混合様相に区分される。) ¹²⁾

②の単純観念の集成としての様相という観点は一しばらくおき、①の実体と様相に関して考えてみたい。

D) ロックは通常、思考を精神あるいは魂という実体の属性とは考えない。属性とはその実体に必然的に所属する本質である。彼は第2巻第1章においてデカルトの実体概念を批判しながら「思考」を魂 (Soul) の作用としてとらえている。

「私は、魂はいつも思考し、その存在する間絶えず自分自身のうちに観念を現実知覚し、ちょうど現実延長のあることが物体から分離できないように、現実思考することは魂から分離できないという説があることを知っている。」 ¹³⁾

「私自身は白状すると、観念をいつも観想するとそれ自身で知覚しないような鈍い魂のひとつをもっている。また、物体が運動することと同様、魂がいつも思考する必然性を想念できない。なぜならば (私が思うに) 観念の知覚 (思考) は魂に対して、運動が物体に対するようなものであり、魂の本質ではなく、その作用のひとつだからである。」 ¹⁴⁾

思考は魂の作用であって、その属性 (本質) ではない。思考が本質であれば思考しないことはその実体には許されないからである。「思考の様相」という表現の意味は、思考することを本質とする実体との関係において述べられているのではなく、内省によって経験される様々な心的作用の全容を事象記述したものということになる。したがって、この思考は「記述A」における内省の単純観念としての心のふたつの作用、すなわち知覚 (思考) と有意 (意志) の両者を含んだ概念である。このことは、「記述C」における思考の様相の具体的記述のなかに、有意 (Volition) が存在することをみれば明らかである。結局、「思考の様相」という概念は、「記述B」にみられるように、魂の作用 (機能) の表現形態を「思考の変容」として分類し記述したものということになる。また、魂が実体であったとしても、その実体性を保障するものは、私たちの思考ではない。思考が存在する以上、思考するものがなければならないという、デカルト的な精神的実体の存在証明は、ロックにおいては成り立たない。思考は、実体の属性でも本質でもなく、その偶有性にすぎないからである。

E) 様相に関する②の立場、すなわち、単純観念の集成という観点はどうか。これもまた問題がある。「記述A」にみられるように、内省の単純観念とされる心の主要な活動がふたつしかない以上、単純様相は知覚 (思考) もしくは有意 (意志) それぞれの集成であり、複雑様相は両者の集成である。「記述C」に挙げられている多様な様相は、多少の問題はあるが、この集成の仕方の密度や強度として位置付けることが可能である。しかし、どの様相を取り上げても、これらの様相の内容は、それを構成する単純観念 (知覚と有意) に還元されることによって、判明になるわけではない。この点で、これらは可感的観念からなる複雑観念の場合とは異なるのである。

問題の本質は、内省の単純観念が、「記述A」にあるように、知覚 (思惟) と有意 (意志) の二つであるとするロックの最初の明言の可否である。これらを単純観念として扱うことは、はたして妥当で

あろうか。

「記述A」を再考してみると、第一に、知覚は思考と、有意は意志 (willing) と同一視されている。そしてまた、思考する力能 (知性)、有意の力能 (意志) を機能と呼びかえて、これらを単純観念のうちに数えている。確かにこれらの力能は内省において認知される。しかし、これらは内省の対象としてあらわれてくるわけではない。これらは内省する働きそのものを言い換えたにすぎない。たとえば、私が眼前の白紙をみているとしよう。私は白さや広がり私の目の機能の対象として認知する。しかし、私は、私の目を見ることはないし、私の目の機能を対象的に認知することもない。ロックもまた、彼の具体的分析において、常に繰り返して注意しているように、これら内省の単純観念は、内省する心の力能・機能・作用である。第2巻第6章「内省の単純観念について」の冒頭で、ロックが次のように説明しているのは、厳密に言えば、誤っている。

「心は、これまでの数章で挙げた観念を外部から受け取るが、視線を内へ自分自身に向けて、自分の持つ観念についてとなむ自分自身の作用 (Actions) を観察するとき、これから別の観念を得る。この観念は、心が外の事物から受け取った観念のどれにも劣らず、心が観想する対象であることができる。(…other Ideas, which are as capable to be the Objects of its Contemplation, as any of those it received from foreign things…)」¹⁵⁾

心の機能を内省の単純観念とするためには、機能とその機能自身の対象として扱うことが必要となる。しかしこれには無理がある。無理を承知で、ロックは、心の機能を内省の単純観念としているのである。be capable to be the Objects という可能表現は、この苦渋を暗示している。心の2大機能である知性と意志を単純観念とすることから生み出されるのは、「記述C」で述べられているような思惟の様相を、その多様性において、構成論的見地から記述する可能性である。しかし、先に述べたように、「記述C」の諸心的活動が、心の2大機能に還元されたとしても、心的活動そのものの実態が明らかになるわけではない。

したがって、機能論的見地から見れば、「知性と意志」は心の機能・作用であって、内省において見いだされる対象ではない。

F) かくして、ロックは、知性と意志の二つの機能を、一方では機能として、他方では単純観念として扱うという矛盾を抱え込むことになったのである。彼は如何にしてこの矛盾を糊塗するのだろうか。それは知覚概念を改変し、二重化することによってである。

知覚について、彼は第2巻第9章「知覚について」で、次のように述べている。

「知覚は、私たちの持つ観念に対して働く心の最初の機能であるので、内省から得る最初の最も単純な観念で、思考一般 (Thinking in general) と呼ぶ者もある。もっともイギリス語の本来の語法では、思考は観念に関する心の作用のなかで、心が能動的であるような種類を意味表示し、この場合、心はある程度の自発的な注意を以て、何かの事物を考察する。というのも、単なるありのままの知覚 (bare naked Perception) では、心は大部分ただ受動的で、その知覚するものを知覚せずにはいられないのである。」¹⁶⁾

思考一般と同一視される知覚とは、内省の単純観念としての知覚である。これは、もうひとつの単純観念とみなされる有意とともに、「思考」の様相を形成する。一方、単なるありのままの知覚、すなわち受動的知覚は、心の機能のうちの一つである。第2巻第21章における知性の定義「知覚の力能は私たちが知性と呼ぶところのものである」¹⁷⁾の知覚は、受動的知覚ではなく、思考一般と同一視される知覚（思考）なのである。

このように知覚という概念は二重の意味を持ち、その表現における同一性が、ある場合には「観念の構成主義的方法」の一貫性を保障し、ある場合には、知覚をその作用力能において考察する「機能論的方法」を生かすのに役立っている。

3. 知性の機能と種類

A) 知覚の力能、すなわち知性の機能の考察に移りたい。

「知覚」は人間の持つ「知性」と「意志」という二つの力能の一つであり、「思考」とも呼ばれる。（前章の「記述A」による）これは、思考の様相に対しては単純観念として位置付けられる。単純観念ならば、その定義からして、違った諸観念にそれ以上区別することができないはずである。しかし、これを機能とみなすとき、この知覚の機能が単純であることにはならない。ロックの事象記述の方法は、この知覚機能（思考機能）の様々な働きを見逃してはいない。

この機能に関する最初の事象記述は『人間知性論』第2巻第9章から11章にかけてあらわれる。ここで、思考の機能は原理的で基本的なものから複雑で高度な機能にいたるまで次のように分類され、順次それら一つ一つが説明される。ここで取り上げられている諸機能を以下にまとめてみよう。

- ①知覚 (Perception) 感官を通して受け取る印銘を心が受け取り観念が作り出されること。
- ②把持 (Retention) 心が感覚あるいは内省から受け取ってある観念を維持すること。
(観想 (Contemplation), 記憶 (Memory) をふくむ)
- ③識別 (Discerning)
- ④比較 (Comparing)
- ⑤構成 (Composition)
- ⑥名付けること、あるいは言語記号の使用 (Naming or Use of Words)
- ⑦抽象 (Abstraction)

この知覚機能（思考機能）の分類はその一部として①の知覚を含んでいる。これは、前に述べた思考の様相という表現の場合と同様、同じ知覚という概念が二重の意味で使われているからである。

①の知覚が、前章の「記述D」における「単なるありのままの知覚」すなわち受動的知覚である。これに対して能動的知覚は、②の把持の一部分である観想の位置付けだけは問題があるが、記憶以下、③の識別から⑦の抽象まで心の能動的機能の総称であろう。したがって思考一般と同一視される知覚は、①から⑦までの、この分類全体をさす。

B) この7種類の心的機能の対象とこのような分類の持つ意味とについて補足をしたい。ロックは第

2巻11章14節においてこの分類の意味について次のように解説している。

「知性で使われる最初の心的機能・作用は前述のようなものだと思う。そしてこれらの機能・作用はすべての観念一般 (all its Ideas in general) について行使されるが、私がこれまでにあげてきた事例は主として単純観念の場合であった。で、私がこうした心的機能の説明を、複雑観念について言わなければならないことへ進むに先立って、単純観念の説明に付け足したのは、次の理由による。

第1、これらの機能のいくつかは、まずはじめは主に単純観念について行使されるので、[単純観念を扱う] 普通の方法で自然に従えば、それらの機能の起こり・進みゆき・段階的進歩を跡づけ明らかにすることができるからである。

第2、心の諸機能が単純観念に対して作用する様子を観察すると、単純観念は大多数の人の心で複雑観念より明晰・精確・判明なので、はるかに間違いやすい複雑観念について心が抽象したり、名前を付けたり、比較したり、その他いろいろの作用を行使する様子をいっそうよく検討でき学べるからである。

第3、(省略)」¹⁸⁾

この説明から私たちは次の点を確認しておかなければならない。

第1に、これらの諸機能は、すべての観念一般に対して行使される。したがって、これらは単純観念と複雑観念のどちらに対しても行使される力能である。複雑観念に対して働く機能はこれらの諸機能の働きがより複雑化したものにすぎないのである。

第2に、この分類の中の諸機能は、ここでは主として単純観念に対する働き方が考察されている。これは、ロックの説明によれば、「[単純観念を扱う]普通の方法で、自然にしたがって」、考察されているからである。

この「普通の方法」とは感覚の単純観念を記述するときと同様の方法であるから、「事象記述の平明な方法」と呼ばれるものに一致する。

また「自然に従う」とはどういうことであろうか。私は『人間知性論』第1巻、第2巻の「自然」の用法を種々検討した結果、「自然」は第1巻では、「生得観念は自然が与えたものである」とする生得観念論者の意見をロックが批判する際、使用されているのが大半である。第2巻では、ロックの観念学的前提をなす「単純観念の知覚」という事実を、「自然」の所与としてそのまま認め、その観念の生み出される原因を考察する物性的考察を排除する時、使用される。つまり、「自然に従う」とは物理的自然法則に従うという意味ではなく、人間の様々な機能（とくに単純観念の知覚という機能）を、そのまま人間の「本性」として、「自然」に与えられたものとみなすということである。

第3に、この「自然に従う」事象記述が、人間に固有の機能の「起こり・進みゆき・段階的進歩を跡づけていること」である。①から⑦にいたる諸機能は、それぞれ独立したばらばらの機能ではない。①の知覚がなければ、②の把時の機能は成立せず、①②の機能を前提しなければ、識別・比較・構成という③④⑤の機能は成立しない。また⑥⑦の機能は、動物類には認められず、より進化した人間固有の機能である。

ロックは、機能の発生順序、発達の段階的進歩という観点を導入することで、一方では、胎児から成人までの人間の精神の発達を跡付け、他方では、①から⑤までの機能が多少は動物類にも認められることから、各種被造物のそれぞれの段階を区分する基準としてこれらの諸機能を位置付けるのである。したがって、この分類は、人間の心的諸機能の発生と成長の過程を理論化すること、また全被造物を機能において分類すること、こうした諸問題への展望を開いている。そこで、私はこの分類を「心的機能の発生論的段階的 분류」と名付けておきたい。

C) ロックは、前節で述べた7つの分類とは異なる、「知覚の機能」すなわち知性の分類を、他に二つあげている。『人間知性論』第2巻12章および21章の分類である。

まず、第12章第1節において、「心が単純観念のうゑにその力能を発動させる場合の心の働き」として次の3つをあげる。

「①いくつかの単純観念を一つの複合観念に集成すること。こうして、いっさいの複雑観念が作られる。

②単純観念であれ、複雑観念であれ、二つの観念をいっしょにし、互いに傍らへ置いて、一つの観念に合一せず一度に眺めることであり、このやり方で関係のすべての観念が得られる。

③観念を、その実在するときは同伴する他のすべての観念から分離することであり、これは抽象と呼ばれ、こうしてすべての一般観念が作られる。」¹⁹⁾

この3分類の機能は、すべて、前節で述べた7分類すなわち「心的機能の発生論的段階的 분류」のうちに含まれる。①は「構成」にあたり、②は「比較」、③は「抽象」である。だが、この分類には、単純観念の受容に随伴する3機能「知覚・把時・識別」は含まれていない。この分類においては、単純観念がすでに受容されていることが前提されているからである。ロックは複雑観念を「様相、実体、関係」²⁰⁾に分類するので、この3種類の複雑観念を構成する場合の主要機能と、言語表現の活動において「一般観念」を作り出す際の心的機能すなわち「抽象」だけを取り上げたということであろう。

これをわたしは「観念の構成における主要機能の分類」と呼ぶことにする。

D) もうひとつの分類がある。それは第2巻21章で、意志と知性の力能を定義する際、与えられる。ここでは、次のように知性が定義される。

「知覚の力能は知性と呼ばれるものである。私たちが知性の働きとする知覚は3種類である。

①私たちの心での観念の知覚

②記号の意味表示の知覚

③私たちの持つ観念のあるものの間に存する結合もしくは背馳、一致もしくは不一致の知覚

これらすべては知性あるいは知覚の力能に属している。ただし、『私たちが理解する』と言うことが慣用で許されるのは、あとの二つだけである。」²¹⁾

この分類は、知性 (understanding) の働きが何を対象とするかにかかわる。知覚の力能が知性であるということは、知性がなにかの対象を知覚する (perceive) ことである。この知覚する対象をロック

は①観念②記号の意味③真知と臆見の三つに区分するのである。

①の「観念の知覚」は、先に検討した心的機能の二つの分類（「心的機能の発生論的段階的分類」と「観念の構成における主要機能の分類」）にみられる諸機能の働きを、私たちの心が自ら理解するときの力能（機能）である。したがって、観念とこの力能にかかわる諸問題は、『人間知性論』第2巻の中心問題となっている。

②の「記号の意味表示の知覚」は私たちが言語を理解する能力をさす。記号が意味表示するものは観念とその関係である。私たちの言語の成立には、「心的機能の発生論的段階的分類」にみられる諸機能、最終的には「名付け」と「抽象」の機能が必要であった。しかし、そのようにして、いったん成立した言語の意味が、人々によって理解されるということは、「記号によって表現された世界」を、「記号が表示する観念の世界」に再び還元する力能（機能）が人々の心に存在していることを意味する。したがって、観念と記号を結びつける力能の分析は、『人間知性論』第3巻の主題となる。

③の「観念のあるもの間に存する結合もしくは背馳、一致もしくは不一致の知覚」とは真知（knowledge）の知覚の力能である。ロックは『人間知性論』第4巻冒頭において、「真知は私たちの観念のあるものの結合・一致あるいは不一致・背馳の知覚に他ならないように、私には思われる」²²⁾と述べ、第4巻全体を真知と臆見の問題の解明にあてた。この巻で論じられている「真知」と「臆見」を人間が理解する力能が③の力能である。

したがって、この3種類の知性の力能は、「知性の働く対象の分類」である。そして、この分類はそれぞれ『人間知性論』の第2巻・第3巻・第4巻の主題と重なりあうのである。

4. 理知の機能

A) ここで、これまでに取り上げた諸機能とは段階を異にする一つの機能を取り上げておきたい。それは「理知 (Reason)」である。理知は、第1巻第2章において、「既知の原理もしくは命題から未知の真理を演繹する機能に他ならない」²³⁾と定義されている。そこでロックは、理知論を展開する第4巻17章の冒頭で、理知の多様な意味を排除し、この定義による意味のみを取り上げる。

「イギリス語の理知という言葉には様々な意味表示がある。ある時は真の明晰な原理 (True and clear Principles) とされ、ある時はそうした原理からの明晰公明な演繹 (clear and fair deductions) とされ、またある時は原因とくに究極因 (the Cause, and particularly the final Cause) とされる。が、ここで私の行なう考察はこれらすべてと違う意味表示でなのである。それは人間のある機能 (a Faculty in Man) を、人間が獣と区別されると想定され、明白に人間が獣をはるかにしのぐ点である機能を、表すとしてである。」²⁴⁾

ここで述べられているように、「理知」は「機能」として限定された意味でのみ使われる。したがって、このロックのあげる理知の意味のうちでは2番目の「明晰公明な演繹」を行なう「機能」を表している。

理知が機能であるとする、この機能は何物かに対する機能である。機能の働く対象は何か。それは「原理」もしくは「命題」である。原理は命題として与えられるので、一括して命題としてもよか

ろう。これまでに述べてきた諸機能は、その働く対象が観念であった。理知は、観念に直接働く力能ではない。ロックは、上の引用文に続いて、次のように述べる。

「すでに明示しておいたように、もし一般的な真知が私たち自身の観念の一致あるいは不一致の知覚に存し、私たちの外のすべての事物の存在の真知(神なるものについては除く[中略])が私たちの感官覚によってだけ得られるとすれば、そうすれば、外部の感覚(outward Sense)と内部の知覚(inward Perception)の他に何か他の機能が働くどんな余地があるか。理知のどんな必要があるか。大いにある。私たちの真知の拡大のためにも同意の規制のためにも。」²⁵⁾

ここでは理知の機能は、外部の感覚・内部の知覚とは別の機能であることが明言されている。特に内部の知覚とは別の機能である点が重要である。前前章の「記述A」によれば、内部の知覚とは、内省の単純観念として考えられ、もう一つの内省の単純観念、有意と共に心の主要な活動の一つである。内部の知覚とは別の機能であるということは、この知覚・有意とは別の機能であるということになるのだろうか。そうではないとロックは考えていたようである。その理由は、「記述A」及び「記述C」において、内省の単純観念の様相の一つとして、「推理・判断・真知」が含まれているからである。一方で、理知を内省の単純観念とは別の機能とし、他方で思考の様相に位置づけたりすることは、一貫性を欠く。だが、よく考えてみると、上の引用文は、主に理知と真知・同意のあいだの関係が述べられているのであって、観念の受容を問題にするような位相で、理知が考察されているのではない。理知が問題になるのは、真知との関係においてであるから、理知の機能は、知覚と同列の機能ではなく、真知の獲得において働く、人間固有の機能として、知覚を越えた機能として、捉えられているらしい。

それでは真知と理知はどの様に関係するのであろうか。真知論の詳細は別稿(『ロックの力能概念についてIII』²⁶⁾)にゆずって、ここでは真知の程度による分類のみを問題にすることにしたい。真知の程度は①直感的真知 ②論証的真知 ③感覺的真知に分けられる。(『人間知性論』第4巻第2章参照)

上の記述の「一般的な真知」とは概ね①直感的真知をさす。これは観念の一致・不一致を直接知覚し、他の観念の介在を必要としない場合である。「私たちの外のすべての事物の存在の真知」は③の感覺的真知である。したがって、理知が必要とされるのは②の論証的真知においてである。

また引用文の最後にてでくる「同意の規制」は、真知ではなく判断の領域に属する。判断の対象は、蓋然知である。判断の結果、蓋然知は命題として成立し、その蓋然的な命題には同意がともなう。

結局、理知が必要なものは、論証的真知と蓋然知の場合である。

そこでロックは理知の機能という側面から真知と蓋然知の全領域を次のように区分する。

「①直感的真知(心にある観念をそれだけで直接に比較できる場合のその観念の一致・不一致。論証機能(discursive Faculty)は使われず、推理(Reasoning)は必要でない)

②理知的真知(論証的真知とおなじ。観念を直接に並べて比較できない場合、それと比較できる他の観念の介在によって、その一致・不一致を知覚する。介在観念は一つの場合も、多数の観念の連結である場合もある。)

③判断による同意(蓋然知と同じ。理知的真知の場合と同じく、観念を直接比較できない場合、その両観念を比較するための介在概念とその観念との一致・不一致が絶対確実でない場合、)」²⁷⁾

理知の機能が働くのは②と③の場合である。したがって、この分類では、先の「論証的真知と蓋然知」の両者が、「理知的真知と判断による同意」と言い換えられているのである。

B) 最後に、この論証と判断において働く理知機能の働きが如何なるものかをまとめておくことにする。ロックは理知の働きを次の4つの段階に分けて説明している。

「それゆえ、私たちは理知に次の4つの段階を考察できよう。

- ①第1かつ最高 [にたいせつな段階] は論拠を発見・見いだすことである。
- ②第2は、論拠の結合と力を平明かつ容易に知覚できるようにするため、論拠を規則的方法的に配置し、明晰かつ適当な順序に置くことである。
- ③第3は論拠の結合を知覚することである。
- ④第4は、正しい結論を作ることである。」²⁸⁾

理知をこのように区分することによって、ロックは、通例「理知」の機能の中核であると考えられている「三段論法」が理知の機能の中の部分的なものでしかないことを主張する。三段論法は③の論拠の結合を明示するものにすぎないからである。三段論法は真理あるいは誤謬の発見に役に立たないのである。

また、三段論法で明示される論拠の結合を知覚する以前に、私達は、論拠そのものの内に含まれる観念を発見しなければならないし、観念の結合を知覚しなければならない。すなわち①②の方が、理知においては重要であると主張する。

さて、理知の機能の中心をなす「推論 (inference)」の機能は、本来、命題に対して働く。

「推論する (to infer) とは、真として立てられた一つの命題の力で、他の命題を真として引き込むこと、すなわち、推論される命題の二つの観念のそうした [真の] 結合を見ること、あるいは想定することに他ならない。」²⁹⁾

この記述における二つの観念とは何か。なぜ命題がここで観念に置き換えられているのか。これが問題である。

三段論法における推論は前提となる真なる命題から、結論となる真なる命題への過程である。この過程の真理性を保証するものは前提となる命題 (大小の前提) の、絶対確実性であり、大小の前提に含まれていなかった知識が、結論において新しく生み出されるのではない。ロックは、命題を観念の結合あるいは一致・不一致の表現と考えているので、正しい推論では、大小の前提に含まれていた観念以外の観念が、結論において生み出されることはない。推論される命題には、前提に含まれていた観念が存在するのみである。したがって、結論となる命題の真理性は、本来、大小の前提に含まれていた観念の結合の正しさに基づく。観念の結合の正しさが命題の真理性を保証するのである。上の記述の「二つの観念」とは、推論された命題の中でとりあげられる、もともと大小の前提に含まれていた観念を指すことになる。言い替えば、命題の問題が観念の問題に移されているのである。

ともあれ、ロックは、推論における中心をなす機能を理知の4つの段階の内、③の論拠の結合ではなく、①②の論拠の発見と論拠の配置を重要視する。しかもこれを、観念の結合の問題、すなわち「中

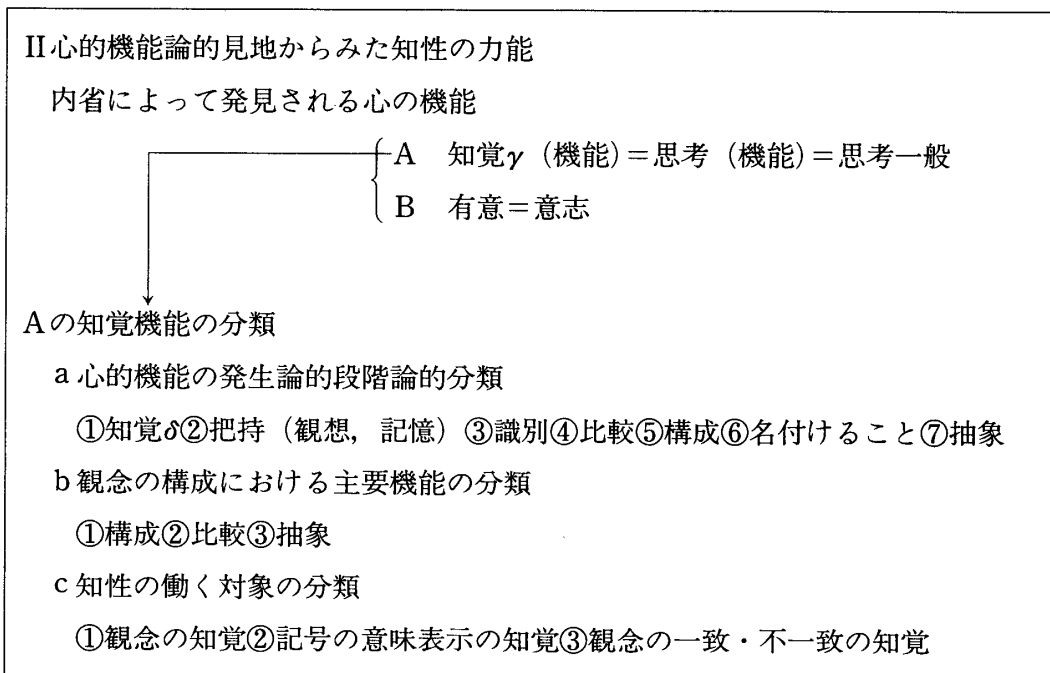
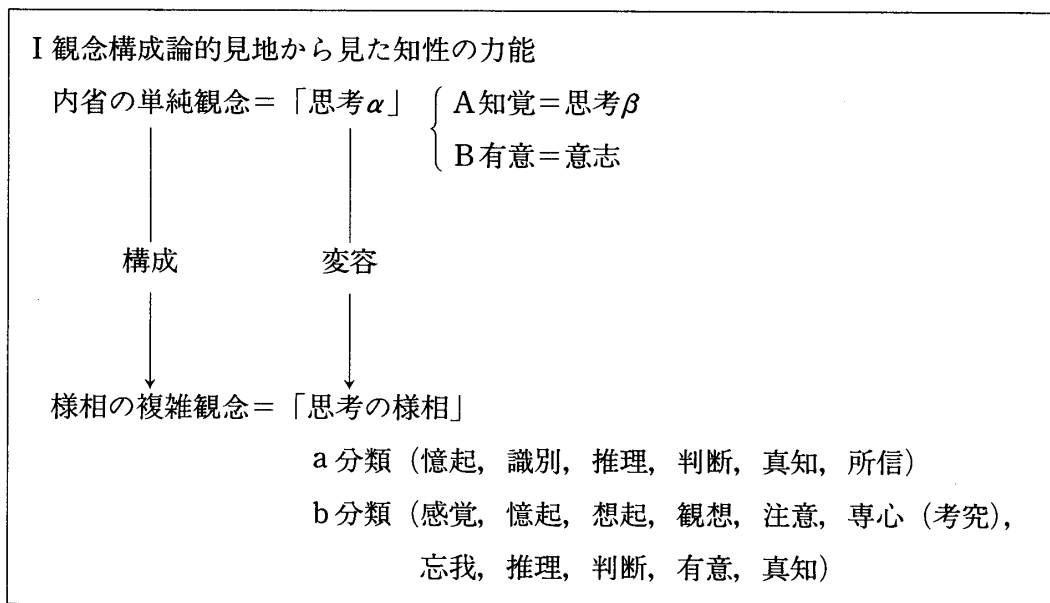
間観念を介して観念が一致するかどうかという問題」として処理しようとしている。

「いま、問題は、心がこの推論を正しく行ってしまったか、しなかったかを知ることである。もし心が中間観念を見だし、適正な順序に置かれた中間観念の結合を眺めて、推論をしてしまったとすれば、心は理性的に (rationally) すすみ、正しい推論を行ってしまったのである。」³⁰⁾

5. 結 論

これまで述べてきたロックの知性の力能 (機能) に対する諸見解をまとめておきたい。

1. 観念に対して働く機能



2. 命題に対して働く機能としての理知

A理知の対象	
①理知的真知（論証的真知）	②判断による同意
B理知の機能	
①論拠の発見	②論拠の配置
③論拠の結合	④正しい結論

上の表から分かるように、知性の機能は、観念に対する機能と命題に対する機能に大きく分類される。命題に対して働く機能として取り上げられているのは、理知のみであるが、観念に対して働く機能は、構成論的見地からみた場合と心的機能論的見地からみた場合とでは、異なる分類を持つ。

構成論的見地において注意すべき点は、「思考」が内省の単純観念の総体と考えられる場合（思考 α ）と、単純観念の一つ（知覚=思考 β ）として、考えられている場合の両者が共存していることである。

また心的機能論的見地からみた場合、知覚が思考あるいは思考一般と同一視されている場合（知覚 γ ）と、発生論的段階的分類における最初の段階を指す場合（知覚 δ ）が並存している。

こうした用語上の矛盾を回避する事によって、ロックの知性論の構造が幾らか明らかになってくるとおもわれる。これまで述べてきた事象記述は、全体として見れば、知性の力能の総体を捉えようとするロックの苦闘の跡とみなすことが出来る。

ロックの事象記述が私達を感動させるのは、彼の試みが成功したからではなく、有限な人間の知性が、その知性そのものの働きを記述するという、ある意味で達成不可能な目的を追求する人間の悲劇性を、私達も共有しているからである。

注

- 1) 『聖徳学園女子短期大学紀要』第16集, 1990年
- 2) 2.2.1 p.119 [p.158-9]
 (《An Essay Concerning Human Understanding》edited by Peter H. Nidditch, Oxford, 1975, 第2巻第2章第1節119ページ。[]は岩波文庫, 大槻春彦訳のページ数。本論文中の訳文は必ずしも大槻訳を踏襲せず。)
- 3) 2.1.2 p.104 [p.134]
- 4) 2.1.3 p.105 [p.134]
- 5) 2.1.4 p.105 [p.135]
- 6) 2.1.4 p.105-6 [P.135-6]
- 7) 『聖徳学園女子短期大学紀要』第22集, 1994年
- 8) 2.6.2 p.128 [p.174]
- 9) 2.19.1 p.226 [p.114]
- 10) 2.19.1 and 2 p.226-7 [p.114-5]
- 11) 2.12.4 p.165 [p.9-10]
- 12) 2.12.5 p.165 [p.10]
- 13) 2.1.9 p.108 [p.139]
- 14) 2.1.10 p.108 [p.140]
- 15) 2.6.1 p.127 [p.174]

- 16) 2 . 9 . 1 p.143 [p.201]
- 17) 2 . 21 . 2 p.236 [p.131]
- 18) 2 . 11 . 14 p.161-2 [p.231-2]
- 19) 2 . 12 . 1 p.163 [p. 7]
- 20) 2 . 12 . 3 p.164 [p. 9]
- 21) 2 . 21 . 5 p.236 [p.131]
- 22) 4 . 1 . 2 p.525 [p. 7]
- 23) 2 . 2 . 9 p.51 [P.47]
- 24) 4 . 17 . 1 p.668 [p.264]
- 25) 4 . 17 . 2 p.668 [p.264]
- 26) 『聖徳学園女子短期大学紀要』第12集, 1986年
- 27) 4 . 17 . 14-17 p.683-5 [p.290-4]
- 28) 4 . 17 . 3 p.669 [p.266]
- 29) 4 . 17 . 4 p.672 [p.271]
- 30) 4 . 17 . 4 p.672 [p.271]